

『千のプラトー』における内在と超越

吉 澤 保

はじめに

『差異と反復』（1968年）で言わばひとまずの完成を示したジル・ドゥルーズの哲学は、『意味の論理学』（1969年）でまた新たな一步を踏み出すことになる。その後、フェリックス・ガタリとの哲学的共同作業が開始され、『千のプラトー』（1980年）は、その集大成であると同時に、『意味の論理学』以降のドゥルーズ哲学の変貌の、またひとまずの完成と言うべき著作でもある。本稿が試みるのは、一見乱雑極まりない『千のプラトー』の哲学の構図を、内在と超越の観点から、いいかえれば、出来事と実体・形相の観点から、記述することである。

「近代哲学はすべて、主語と述語、実体〔substance〕と性質、特殊と普遍によって世界を記述するという難点をめぐって動いている¹」。ホワイトヘッドは、近代哲学の難点を、主語としての実体とその述語としての性質とからなる図式に見いだしている（以降、用語の統一のため、性質、普遍の代わりに形相〔forme〕という語を用いる）。デカルトによれば、私というこの実体は、考えるという形相によって本質的に規定されている。眼前のこの物（実体）をコーヒーカップ（形相）として認識するなど、我々が行う日常的認識も、実体と形

1 Alfred North Whitehead, *Process and Reality*, The Free Press, 1978, p. 49. なお、〔 〕内にはその直前の語の原語が示される。

相とからなる。述語論理学における変項（実体）と述語（形相）をあげることもできる。どんなに複雑な事実でもそれを丹念に解きほぐすなら、実体－形相の図式に帰着し、どんな実在も、主体であれ客体であれ、神でさえもこのような図式をもっている点で変わりはない、と通常想定されている。『千のプラトー』によれば、実体と形相とからなる超越〔transcendence〕だけではなく、超越に権利的に先行するもの、つまり内在〔immanence〕、も存在する。内在は、実体でも形相でもない出来事〔événement〕からなる。内在こそが超越をつくっている。ドゥルーズにとって、真の意味で存在するのは内在に他ならない。ドゥルーズ哲学は内在の哲学である。それゆえにドゥルーズ哲学において要請される実践は内在回帰となる。内在が実践の評価の基準になる。本稿が試みることは、以上の構図を『千のプラトー』において確認することである。第1節でこの著作における超越を主に第3プラトーに依拠しつつ略述する。第2節で超越をつくりだす内在に照準を合わせる。第3節で第2節までの議論から導き出される実践の問題に向かう。

フランソワ・ズーラビクヴィリは、ドゥルーズ哲学を出来事の哲学、内在の哲学として提示する²。論者は、ドゥルーズ哲学のこの規定に賛成するが、著作間の関係も解明すること、もっと大幅に整理してドゥルーズ哲学の構図を抽出することが必要であると考ええる。概念上の多様さ、また、テキスト上の変奏の多様さに反して、ドゥルーズ哲学の構図は単純である。ダヴィッド・ラブジャードは、ドゥルーズの著作（『差異と反復』、『意味の論理学』、『アンチ・オイディプス』（1972年）、『千のプラトー』）を時系列で取り上げながら、つまり、ドゥルーズの主著とも言うべき四作の各々の固有性を無視することなく、ドゥルーズ哲学の全体像を提示しようと試みている。ドゥルーズ哲学を特徴づけようとする際に、著作間の異同を考慮しない研究が多い。論者も、各著作それ自体を、また、著作間の関係を考察することが、ドゥルーズ哲学全体の解明に必要不可欠であると考えている。しかしながら、本稿が主要な対象とする

2 François Zourabichvili, « Deleuze. Une philosophie de l'événement », in *La philosophie de Deleuze*, PUF, 2004, pp. 1-116.

『千のプラトー』の箇所を扱うところでラブジャードの提示する解釈に全面的に賛成することはできない。確かに、まず平面、抽象機械、具体的アジャンスマンを、ついで三つの地層を論じていて、一見、この著作の哲学的構図をうまく整理しているように見えるが、地層を論ずる際に、無機物・有機物・人間の分類、表現と内容との分節のほうを論ずるのみで、実体と形相、合成の統一、重層と傍層などへの言及が欠けている³。地層概念の理解には、実体・形相への着目は不可欠だ。また、『千のプラトー』の哲学全体の構図を考えるには、内在と超越との関係、出来事と実体・形相との関係への着眼は欠かせない。そもそも、ラブジャードの、ドゥルーズ哲学の全体的規定が説得的には見えない。ドゥルーズ哲学は、「出来事の哲学」でも、「内在性の哲学」でも、「流れ（あるいは潜在的なもの）の存在論」でもなく、「常軌を逸した諸運動の哲学」であり、ドゥルーズの著作は、ガタリとの共著も含めて、「常軌を逸した諸運動の百科事典」とされる⁴。「常軌を逸した諸運動」は実質的には、出来事、内在性、潜在的なものであるように見える⁵。最後に、ラブジャードは、『哲学とは何か』（1991年）に一章を割いていないが、晩年のこの主著を対象としなければ、ドゥルーズ哲学全体を規定することはできないのではないか。例えば、『千のプラトー』の「地層」から『哲学とは何か』の「科学」への変化の意味を考えることは、ドゥルーズ哲学の最終的な評価を行う上で欠かすことはできない。

3 David Lapoujade, *Deleuze, les mouvements aberrants*, Minuit, 2014, p. 193-201.

4 *Ibid.*, p. 9.

5 『千のプラトー』の、存立平面（内在）と地層（超越）との対立は、『差異と反復』の「配分の超越論的二重原理」（存在の一義性と存在の類比）に、正しくも関係付けられる。しかしラブジャードはそこから、内在あるいは存在の一義性の権利的な一次性を導き出そうとしない。*Ibid.*, p. 201, p. 295.

1 超越 — 実体と形相

二つの個体化

内在の権利的一次性にも関わらず、ここでは超越から論ずる。『千のプラトー』第10プラトー「1730年 — 強度的なものへの生成、動物への生成、知覚しえぬものへの生成…」は、動物、女性など様々なものへの生成を主題とする。ここで、内在と超越の対立、内在の超越に対する権利的一次性が示される。

ある人格、ある主体、ある物、あるいはある実体、の個体化とは全く違った、個体化の様態がある。我々は、これに此性 [heccéité] という名をあてている。ある季節、ある冬、ある夏、ある時刻、ある日付は、完全なかつ何一つ欠けるところのない個性性を備えているが、物のあるいは主体の個性性に混同されない⁶。

ラテン語 haec (「この物」) からつくられた「此性」は、ドゥンス・スコトゥスに帰せられる中世スコラ哲学の術語であるが、出来事にほぼ重なる概念として使用されている。このプラトーでは、二つの個体化 [individuation]、つまり、1) 実体あるいは主体の個体化、2) 出来事の個体化が提示される。最初の個体化は、形相化された実体の個体化と言い換えることもできる。二つの個体化で問題なのは、一方の、実体と形相と、他方の、出来事である。つまり、前者が超越の個体化、後者が内在の個体化である。

ただし超越と内在は『千のプラトー』では何よりも「平面 [plan]」である⁷。

6 Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Mille plateaux*, Minuit, 1980, pp. 318-319. 強調は著者らによる。Ibid., pp. 309-310.

7 平面は、『意味の論理学』の「表面」, 「器官なき身体」から出発して展開されたものだ。Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 108, p. 220, etc. 『千のプラトー』の「組織と展開の平面」と「存立平面」は、後述する。『哲学とは何か』では、「内在平面」(哲学), 「準拠平面」(科学), 「合成平面」(芸術) が論じられる。Deleuze, Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie ?*, Minuit, 1991, pp. 190-191, etc. 各平面の詳細は、哲学、科学、芸術をそれぞれ論じる章を参照。

このプラトーでこれら二つの平面が提示される。内在と超越は歴史的に様々な意味をもつが、ドゥルーズによる用法もそれらと無関係ではない。ドゥルーズの用法は、神の世界に対する関係の神学的意味、意識の対象に対する関係の現象学的意味に由来しているように見えるが、この用法の歴史的な定位は、本稿が試みるところのものではない。『差異と反復』の中心概念である個体化は、ジルベール・シモンドンの個体化論に触発されて、ドゥルーズが展開したものだ。『千のプラトー』での個体化という術語の使用は、『差異と反復』との関係を指示する。ドゥルーズは著作ごとに自らの哲学を変奏し、変奏について明示的に説明することはほとんどないが、先行する著作の概念を後続する著作で取り上げ直すことで著作間関係を示唆する。『千のプラトー』は『差異と反復』の個体化論をやり直している。個体化は『差異と反復』で一元化されていたが、『千のプラトー』では二重に、つまり内在そして超越において、なされている。

組織と展開の平面

この平面は、本性によって隠されている。つまりこの平面は、この平面が（同時的にあるいは継起的に、共時態であるいは通時態で）与えるものから出発して、推定することしか、帰納することしか、結論することしかできない。実際このような平面は、組織〔organisation〕の平面であり、同様に展開〔développement〕の平面である。それは、構造的あるいは発生的のどちらかであり、また同時に二つである⁸。

この平面は、「組織と展開の平面」である。「目的論的平面、企図、心的原理」、つまり「超越平面」である。それは「類比〔analogie〕平面」である⁹。超越は、『差異と反復』で言う、「存在の類比」、「存在の多義性」、あるいは「表象」を

8 *Mille plateaux*, p. 325.

9 *Idem*.

継承する。それに対して、内在は、「存在の一義性〔univocité〕」を継承する¹⁰。組織と展開の平面は「地層化」を覆っている。「形相と主体、器官と機能は、
「地層〔strate〕」、あるいは地層間の関係、である¹¹」。有機体あるいは合目的性の観点から考えるなら、「主体（実体）」は「器官」に、「形相」は「機能」になる。

先程の引用では、組織は形相の側に、展開は実体の側に配されていた。しかしながら、組織は形相の側、展開は実体の側と短絡すべきではない。「形相の展開」「主体の形成」と言っているところもある¹²。ここで注目すべきは、組織と展開あるいは展開と形成のほうではなく、形相と実体のほうだ。実体は主体と言われているところもある¹³。『千のプラトー』では形相と実体が非常に重要な役割を担わされる。先程の引用にあった、構造、共時態は形相の側に、同様に、発生、通時態は実体の側に、配される。形相と実体こそが、地層を、組織と展開の平面を、つまり超越平面をつくる。そしてこの著作では、構造の側の形相と、発生の側の実体というこの対が、表現と内容という対とも関係しながら、多様に姿を変えて登場する。

地層は、「〈地球〉〔Terre〕」上で生じる現象である。地球は、単に「大地

10 *Ibid.*, p. 311. 上述した「類比平面」の「類比」も参照。第10プラトーで類比は超越の側として頻出する。存在の一義性と存在の類比との対立は以下参照。吉澤, 「ドゥルーズの賭け — 『差異と反復』を中心に — 」, 『仏語仏文学研究』第49号, 2016年, pp. 523-536.

11 *Mille plateaux*, p. 330. 一般に実体と主体との区別は看過できないが、『千のプラトー』では「主体」は「実体」と概念的に近づけられる。註13参照。実体の哲学（分析的同一性）も、主体の哲学（総合的同一性）も、ドゥルーズにとって、超越の哲学にすぎず、それらから区別される出来事の哲学（内在の哲学）こそがドゥルーズの求めるものだ。 *Logique du sens*, pp. 122-132, pp. 162-166.

12 1) 形相－組織、実体－展開: *Mille plateaux*, p. 627.

2) 形相－展開、主体－形成: *Ibid.*, p. 325, p. 632.

13 「存立のあるいは合成〔composition〕の平面（平面態〔planomène〕）は、組織・展開の平面に対立している。組織と展開は、形相と実体に関わる。つまり、形相の展開に、また実体のあるいは主体の形成に、関わる」。強調引用者。 *Ibid.*, p. 632. *Ibid.*, p. 309, p. 318.

〔terre〕」とも言われるが、「器官なき身体〔corps sans organes〕」である¹⁴。そしてこの器官なき身体こそが、超越平面に対する内在平面、つまり「存立〔consistance〕平面」に他ならない¹⁵。存立平面は後で取り上げる。諸々の地層の間に「アジャンスマン〔agencement〕」がある。アジャンスマンはこの意味で「間層〔interstrate〕」でもある¹⁶。器官なき身体上に、地層そしてアジャンスマンが積み重なっている。

『意味の論理学』でドゥルーズは、アントナン・アルトーの「器官なき身体」を、「動的発生」における重要な概念として使っている。この著作では、器官なき身体は、「非物体的なもの」（「表面」）の次元に対する「物体」（「深さ」）の次元に定位されていた¹⁷。『千のプラトー』では、器官なき身体は、存立平面と外延を等しくさせられる¹⁸。『対話』（1977年）で、ガタリが術語として用いていたアジャンスマンは、『アンチ・オイディプス』の、同じくガタリのもとと術語であった「欲望する機械」に取って代わった¹⁹。配置などを通常意味するこの一般名詞は、「抽象機械〔machine abstraite〕」と関係づけられ、独自の意味で使われる。『千のプラトー』では、「地質学」そのものから始めて、大地、「領土〔territorialité〕」・「脱領土化〔déterritorialisation〕」・「再領土化

14 *Ibid.*, p. 53-54, p. 627, p. 635. 〈 〉は原文の語が大文字で始まることを示す。

15 *Ibid.*, p. 633.

16 「アジャンスマンは、二つの層の間、二つの地層の間、にあり、従って、地層の方へ向かう一面をもつが（その意味でこれは間層である）、同時にまた、他所、つまり器官なき身体、言いかえれば存立平面、に向かう一面ももつ（メタ地層である）」。*Ibid.*, p. 54. 強調は著者らによる。これは第3プラトー「BC10000年 — 道德の地質学（大地は己を誰だと思っているのか?）」の一節である。議論は、チャレンジャー教授（コナン・ドイルの創出した主人公）による講演という形で展開される。この原文は直説法半過去形で書かれ自由間接話法となっているが、訳ではそのニュアンスを反映していない。第3プラトーの自由間接話法に関しては以下でも同様に訳出する。アジャンスマンと地層との関係は他に以下を参照。*Ibid.*, p. 93, p. 627, p. 629.

17 *Logique du sens*, p. 108, p. 220, etc.

18 *Mille plateaux*, p. 633.

19 Gilles Deleuze, Claire Parnet, *Dialogues*, Flammarion 1977; éd. augmentée, 1996, pp. 107-108.

〔reterritorialisation〕, 「緯度」・「経度」など地質学的あるいは地理学的術語が多用される。地層もその一つである。ドゥルーズの哲学では、本来的に存在するのは内在である。つまり、共存する出来事である。内在から超越が派生するにせよ、派生のプロセスも含めて、すべては、出来事の共存から始まる。「ニーチェは、歴史を、永遠的なものではなく、歴史以下的なものに、あるいは歴史以上のものに、[つまり]〈反時代的なもの〔Intempestif〕〉に、対立させている。〈反時代的なもの〉は、以下のものの異名である。[つまり,]此性, 生成, 生成の純粹無垢(記憶に対する忘却, 歴史に対する地理, 模写に対する地図, 樹木状組織に対するリゾーム)²⁰」。「反時代的なもの」は出来事である。歴史, 時間, 起源・目的に対する, 地理, 空間, 中間へのアクセントが、『千のプラトー』の哲学を特徴づけている²¹。以上, 地質学的, 地理学的諸概念が, ドゥルーズ哲学の概念としてふさわしい所以である。

合成の統一, 重層と傍層

地層は, コードと環境, 形相と実体からなる。言い換えれば, コード化された環境, 形相化された実体からなる。この著作では, コード〔code〕は形相に, 環境〔milieu〕は実体に, 概念的に近づけられる²²。地層には二重の意味がある。地層化を主題とする第3プラトーの考察に入っているが, このプラトーの記述に従い, 最初に, 実体・形相の観点から捉えられた地層を取り上げる。まず地層には, 一つの地層であるために, 「合成の統一〔unité de composition〕」がある。合成の統一は, 一つの地層のなかで変わらない。

第一に, 地層はまさに合成の統一を有し, 合成の統一によって, 地層は, 一つの地層であると言える。[合成の統一は以下のものである。][1] 分子的素

20 *Mille plateaux*, p. 363. 引用文中の [] は引用者による補足, 説明である。

21 *Ibid.*, p. 321, pp. 359-361.

22 *Ibid.*, p. 627. ただし, 環境と実体, コードと形相はそれぞれ違う意味で用いられているところも多い。外部環境・内部環境, 媒介的環境, 結合された環境: *Ibid.*, pp. 65-69.

材〔matériaux〕, [2] 実体的要素〔元素〕, [3] 形相的關係あるいは特徴。素材は、存立平面の形相化されない質料〔matière〕ではない。それは既に地層化されており、また「基層〔substrate〕」に由来する²³。

これら三つの要素は、結晶で言うなら、1) 無定形の〔amorphe〕環境、2) 結晶、3) 結晶の限界である。有機物では、1) 前生命的スープ、2) 有機体の元素と化合物、3) 細胞の膜²⁴。合成の統一という観点から捉える限り、地層はどれも、結晶も軟体動物も人間も相互に同じである。これは、結晶や軟体動物が相互に同じ分子、同じ実体、同じ形相からできているということではない。ここで問題となっているのは、分子的素材、実体的要素、形相的關係にすぎない。確認すべきは殊に、実体的要素の実体性、形相的關係の形相性である。どの地層にも必ず、実体と形相とがある。合成の統一は、地層の「中心層」, 「中心環」, 「中心帯」, 「統合態〔Ecumène〕」とも呼ばれる²⁵。

しかしながら地層は、中心層だけで存在しているのではない。地層は周辺の複数の層からなる。一つの地層には変わるものもある。

しかし地層は、[1] 諸傍層〔parastrate〕と[2] 諸重層〔épistrate〕とに分裂している。つまり、[1] 自らの〔地層〕の還元不可能な諸形相と、自らの結合された諸環境〔milieu associé〕とに従って、諸傍層に、[2] 自らの形相化された諸実体の層と、自らの媒介的諸環境〔milieu intermédiaire〕とに従って、諸重層に、分裂している。重層と傍層とはそれら自体、地層と見なされなければならない²⁶。

中心層は周辺から独立して存在することはなく、周辺を巻き込みながら、必ず複数の層に断片化する。素材から実体的要素へと、つまり、「外部環境

23 *Ibid.*, p. 65. 強調は著者らによる。 *Ibid.*, pp. 60-61, p. 93, p. 627.

24 *Ibid.*, pp. 65-66.

25 *Ibid.*, p. 66. 中心帯 : *Ibid.*, p. 68.

26 *Ibid.*, p. 93. 強調は著者らによる。 *Ibid.*, pp. 66-73, p. 627.

〔milieu extérieur〕から「内部環境〔milieu intérieur〕」へと、至るには、その間に、「媒介的環境」が介入することになる。例えば、結晶的地層には、外部の素材と、内部の核との間に、多くの媒介的環境がある。これらの媒介的環境が、重層である²⁷。実体との関係で媒介的環境、つまり重層があるように、形相との関係では「結合された環境」がある。有機体、殊に動物において、地層の形相との関係で、第三の環境、つまり結合された環境が問題になる（第一の環境は、外部環境・内部環境、第二の環境は媒介的環境）。結合された環境として、（ユクスキュルの）ダニの世界、蜘蛛の巣があげられている。結合された環境が傍層である²⁸。

一つの地層は、唯一の中心層に還元されるのではない。複数の層、つまり重層と傍層とになる。重層は中心層の実体に、傍層は中心層の形相に、関わる。そして重層も傍層もそれぞれ地層に他ならない。際限なく断片化は続く。一つの地層には、変わらないものと変わり続けるものとがある。

地層の、〈統合態〉の上でつまり合成の統一の上で、諸重層と諸傍層とは、揺れ動くことを、滑ることを、移動することを、変化することを、続けて、一方〔重層〕は、逃走線と脱領土化の運動とによって、他方〔傍層〕は、脱コード化のあるいはずれの、プロセスによって、運び去られ、二つ〔重層と傍層〕は、諸環境の交叉す

27 「実際それら〔媒介的状态〕は、外部の環境と内部の要素との間、実体的要素とそれら〔実体的要素〕の合成物〔化合物〕との間、合成物〔化合物〕と実体との間、そしてまた、形相化された諸実体（内容の実体と表現の実体）の間、を媒介しているからだ。これらの媒介物・重なり合い、これらの圧力、これらの水準、を今後は重層と呼ぶことにしよう」。Ibid., p. 66.

28 「これらの分有〔媒介的環境と結合された環境とが同一の外部性の環境〔milieu d'extériorité〕を分有すること〕が行なわれるのは、同じやり方によってではない。〔1〕地層の中心帯との関連で、媒介的諸環境あるいは媒介的諸状態は、「重層」を構成する。これらの「重層」は、互いに重なり、かつ、新たな周辺に対して新たな中心を形作する。〔2〕しかし、次の別の仕方を「傍層」と呼ぶことにしよう。〔その仕方とは、〕中心帯が、還元不可能な諸形相、および、それら〔諸形相〕に結合された諸環境、に、— 側面でかつ横に〔en côtés et à-côtés〕— 断片化される仕方」。Ibid., p. 68.

るところで交通し合っている²⁹。

表現と内容

ついで第3プラトーが試みるのは、ある地層から別の地層にかけて何が変化していくかを、「内容 [contenu]」と「表現 [expression]」の観点から考察することだ。『千のプラトー』によれば、地層はすべて、内容と表現とに分節されている。内容は「形相化された質料 [matière formée]」、表現は「機能的な構造」である。すべての地層は表現と内容とに分節されている。当然、表現には形相と実体とがあり、内容にも同様だ。ただし分節は常に二重である。地層の中の表現も表現と内容とに、内容も内容と表現とに、分節される。例えば、有機物では、内容の側のタンパク質の中に表現の要素が、表現の側の核酸の中に内容の要素が、ある。これが「二重分節 [double articulation]」である³⁰。表現と内容との区別は、デンマークの言語学者イェルムスレウの使用に由来するが、言語のみならず自然を含むすべての現象にまで拡張されている。

内容と表現との間には、1)「実在的区別」、2)「相互的前提」、がある。実在的区別とは、表現と内容のおおのの形相が、「物自体」のうちで、「現働的に」区別されていることだ。実在的な区別は、単に観察者の精神において区別されるだけではない。一方、実体と形相との間には、実在的な区別はなく、単に「心的あるいは様態的区別」しかない。しかしながら、両項が二重分節以前に実存するというわけではない。「二重分節こそが、各地層において自ら「二重分節」の図案に従ってこの両項を配分し、また、両者の実在的区別を構成している³¹」。このように、表現は内容を、逆に、内容は表現を、前提にする。両者の間には、「対応」、「合致」があるわけではない。ただ単に「同形性 [isomorphisme]」があるだけだ³²。

29 *Ibid.*, p. 72.

30 *Ibid.*, pp. 58-59, p. 92-93, p. 627.

31 *Ibid.*, p. 59.

32 *Ibid.*, p. 59, p. 61, etc.

伝統的に無機物、有機物、人間という区別がなされることが多い。第3プラトーでこれら三つの地層が取り上げられている。このように三つに分類されるのは、それぞれの地層の（表現と内容との）区別の差異によってである。

〔表現と内容との〕実在的区別の三大類型を簡潔に区別することができる。〔1：無機物〕大きさの諸次元に関する形相的－実在的区別 — ここでは表現の共鳴〔résonance〕（導入〔induction〕）が確立される — ，〔2：有機物〕相異なる主体に関する実在的－実在的区別 — ここでは表現の線形性（変換〔transduction〕）が確立される — ，〔3：人間〕相異なる属性あるいはカテゴリーに関する本質的－実在的区別 — ここでは表現の超線形性〔surlinéarité〕（翻訳〔traduction〕）が確立される — ³³。

上述したように、どの地層も、実在的区別である点では変わらない。無機的地層では、内容は分子的であり、表現はモルのである。例えば、モル的なものとしての結晶は、「微視的な分子的相互作用」を巨視的に表現する。内容と表現との間の差異はまず、「大きさの次元（あるいは縮尺の次元）」に関わる。二重分節はここで、大きさに関して二つの次元（モル的なものと分子的なもの）を含む。ここで確立されているのは、表現と内容との間の「共鳴」である³⁴。表現と内容とのもともとの実在的な区別は、無機的地層では、さらに形相的なものである。これは、表現と内容の、それぞれの形相が、同一の集合、同一の物、同一の主体（例えば結晶）を合成しているからだ³⁵。

これに対して、有機的地層では、表現と内容との区別は、同一の主体に関わらない。相異なる二つの主体（実体）に、つまり核酸とタンパク質とに、関わ

³³ *Ibid.*, pp. 92-93.

³⁴ *Ibid.*, p. 75. 共鳴は、シモンドンが個体化論で使った術語である。『差異と反復』では、個体化を決定づける重要な概念であった。Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, p. 356. 第7プラトーでは、「頻度〔fréquence〕」がシニフィアンの体制に関わるのに対して、共鳴はポストシニフィアンの体制に関わる。*Mille plateaux*, pp. 205-206.

³⁵ *Ibid.*, p. 76.

る。有機物の実在的区別は、「分子の二つのクラス間を通っている³⁶」。有機物では、実在的区別は、単なる形相的なものではなく、二つの res に関わるという意味で「実在的」なものである。有機物では、表現と内容との区別は、大きさの次元に関わっていない。表現と内容の双方に既に、モル的なものと分子的なものがある。表現はもはや三次元的なものではなく、「線形的なもの [linéaire]」である。表現は内容から独立している。また内容も表現から独立的である。「一義的に決定されているのはただ単に、他のアミノ酸よりもむしろ、あるアミノ酸のほうが、三つのヌクレオチドの一つのシーケンスによく対応しているということだけだ³⁷」。一つの地層は単に中心層にとどまらず、必ずや、重層と傍層とに展開するが、この展開は、無機的地層では導入によって、有機的地層では変換によって、なされる³⁸。有機体では、増殖および生殖が可能になるだけでなく、遺伝という新しい表現の次元が生じる。

人間的地層では、内容は手－道具、表現は顔－言語、である。「手」は単なる器官ではなく、内容の「一般的形相」である。「道具」は「活動中の形相」であり、「形相化された質料」あるいは「実体」としての、「生産物」を含んでいる。生産物は、形相化された質料、あるいは実体、になるが、ついで、道具としても機能する。手が合成の統一を構成するのに対して、道具という形相は傍層として、生産物という実体は重層として、組織化されることになる³⁹。

表現の形相は「言語 [langage]」であるが、ここでも同様に、傍層としての「多様な形相的な諸ラング」においてしか、また重層としての「音声的実体」などにおいてしか、存在しない。音声的実体が、他の様々な器官的要素を、つまり、単に喉頭のみならず、口と唇、そして顔面の動性すべて、「顔」全体を、

36 *Ibid.*, p. 77.

37 *Idem.* 「三つのヌクレオチド」は遺伝子核酸をつくるものであり、それらからなる「一つのシーケンス」は一つのコドン（遺伝暗号の最小単位）に相当する。コドンは、遺伝暗号翻訳の時、運搬 RNA と結合し、アミノ酸を指定する。

38 *Ibid.*, p. 78.

39 *Ibid.*, p. 79. ここでも二重分節が確認できる。内容・表現への分節のみならず、それぞれ、手・道具への分節、顔・言語への分節、がある。

作動させることになる⁴⁰。遺伝的表現が線形性、殊に空間的線形性であるのに対して、言語的表現は、「時間的線形性」、言い換えれば「超線形性」である。空間的線形性も「継起」に関わるが、時間的線形性はただ継起だけに関わるのではない。「時間における継起の形相的総合」にも関わる。この総合こそが、「線形的超コード化〔surcodage〕を構成して、他の諸地層の知られていない現象を出現させている⁴¹」。ここではもはや導入、変換ではなく、翻訳が行われる。このように、人間的地層では、言語という表現の形相によって、つまり、「超コード化」あるいは超線形性によって、翻訳が可能になる。なお超線形性は、線形性に対して一つ上の次元にあるために、このような名称になっている。超コード化も同様である。

そして、翻訳によって、単に、あるラングが別のラングのデータを言わば「表象」しうる、ということだけを理解すべきではない。それ以上に、理解すべきことは、ラングが、自らの地層上の自ら自身のデータを用いて、他のあらゆる地層を表象することができ、そして、そのようにして世界の科学的把握に近づくことができるということだ。〔中略〕超コード化あるいは超線形性、というこの特性こそが、言語には単に内容に対する表現の独立性があるだけでなく、諸実体に対する表現の形相の独立性もあることを説明している。つまり、翻訳が可能であるのは、同じ一つの形相がある実体から別の実体へ移行しうる — これは、遺伝子のコードにおいて、例えば、RNA 連鎖と DNA 連鎖との間で、生ずることに反する — からだ⁴²。

このように、言語は人間という地層だけではなく、すべての地層に広がりうる。言語という形相はすべての地層のすべての実体に関わりうる。

人間的地層でも、表現と内容との間の区別は、有機的地層の区別におけるように、実在的なものである。つまり異なる主体（実体）に関わる。「本質的な

40 *Ibid.*, p. 80.

41 *Ibid.*, p. 81.

42 *Idem.* 著者ら強調。

もの」でもある。ここでは表現と内容とは、「相互に還元しえない」「諸属性、存在の諸類、あるいは諸カテゴリー」となっている。人間的地層において初めて「言葉〔語〕」と「物」とが生ずる⁴³。

領土的アジャンスマン

一つの地層は、他の地層の基層の働きをしている。さらに間層の働きをする地層もある。この地層は既に機械状〔machinique〕アジャンスマンでもある⁴⁴。アジャンスマンには領土性の側面と脱領土化の側面とがある。アジャンスマンは地層とは異なるが、領土性の側面をもつために、その限りで地層に属す⁴⁵。アジャンスマンが地層的であるとは、アジャンスマンが領土的であるということだ⁴⁶。そしてアジャンスマンは単に間層的であるだけではなくメタ地層的でもある。メタ地層的である限りにおいて、それは脱領土化の側面をもつ。

「機械状」が前提にする機械という概念は、『千のプラトー』のもっとも一次的な概念である抽象機械のものである。機械は、典型的には、エンジンなどによって駆動される精巧な道具として理解できるが、ドゥルーズの考える勝義の機械はこのようなものではない⁴⁷。地層では、一方の形相、コードと他方の実体、環境とからなる対があった。アジャンスマンでは、地層の環境に領土が代わる。領土は、脱領土化、再領土化とともに、『千のプラトー』の重要な概念群を構成している。第11プラトー「1837年 — リトルネロについて」は、環境から領土化、領土、脱領土化などへのプロセスを取り上げている⁴⁸。

43 *Ibid.*, p. 83.

44 *Ibid.*, p. 54, p. 65, p. 93, p. 627.

45 *Ibid.*, p. 629. 「我々は、シニフィアンスの軸と主体化の軸とに出会っていた。これらは、全く異なる二つの記号系〔sémiotique〕、あるいは二つの地層でさえあった」。引用者強調。*Ibid.*, p. 205. 環境とリズムからどのように領土が生ずるかは以下参照。*Ibid.*, pp. 386-387.

46 *Ibid.*, p. 628.

47 例えば以下参照。 *Dialogues*, p. 125.

48 *Mille plateaux*, pp. 384-388.

地層に還元されないアジャンスマンでは、表現は、「記号的〔sémiotique〕システム」,「記号の体制〔régime de signes〕」に、内容は、「プラグマティックなシステム」,「能動と受動」に、なる⁴⁹。つまり、アジャンスマンは、表現としての「言表行為〔énonciation〕のアジャンスマン」と、内容としての「機械状アジャンスマン」である⁵⁰。表現と内容との間では、地層において見られなかった「新しい関係」が確立されている。「言表〔énoncé〕あるいは表現は、非物体的変容〔transformation incorporelle〕を表現し、これらの非物体的変容は、そのもの（固有性）として物体あるいは内容に「帰属させられる」⁵¹」。

アジャンスマンと抽象機械とを主題とする第4プラトー「言語学の公準」は、ストア派に言及しながら、この点を詳しく論じている。第一に、言表あるいは表現は、非物体的変容を表現している。後述するように、ここで言う非物体的変容は、この著作では、此性、出来事とともに存立平面に登録されている。それは出来事である。超越平面としての地層は、存立平面から出発して存立平面上に積み重ねられるようにつくられていたが、言表行為のアジャンスマンは、ここで存立平面から言わば直接、出来事を受け取る。あるいは、地層は、存立平面からの出来事の直接的介入によって、アジャンスマンになる。言語とともにある人間が行う経験は既にこの点で、他の地層で行われるはずの経験とは異なる。ただし第二に、非物体的変容は、物体あるいは内容に「帰属させられる」。帰属させられるというと、主語としての物体あるいは内容に、非物体的変容（出来事）が述語づけられるかのように思われるが、そうではない。表現あるいは非物体的変容は、物体を表象することも、指向対象とすることも、記述することも、しない。それは、物体のなかに「挿入される」あるいは「介入する」。非物体的変容は「言語行為」である。この挿入あるいは介入は、「内容

49 *Ibid.*, p. 629. 1) 記号的システムと2) プラグマティックなシステムとは以下のようにも表現される。1) 象徴的表現, 記号的〈機械〉, 記号の諸体制。2) テクノロジー的内容, 社会的〈機械〉, 権力の諸形成体。 *Ibid.*, pp. 82-83.

50 *Ibid.*, p. 112, p. 629.

51 *Idem.* 強調は著者らによる。 *Ibid.*, pp. 109-112.

〔物体〕に先回りをするため、それらに遅れをとるため、それらを遅らせるため、あるいは、早めるため、それらを切り離すため、あるいは、一つにまとめるため、それらを他の仕方で切り取るため」になされる。出来事としての「瞬間的〔非物体的〕諸変容」は「アイオーン」に、物体としての「連続的諸変形〔modification continue〕」は「クロノス」に、関わる⁵²。

『意味の論理学』で既にドゥルーズは、ストア派を援用しながら、出来事概念を提示していた。物的なものとは非物的なものとを峻別して、前者を物体・物の状態、後者を出来事、とした。前者は深さに、後者は表面に位置づけられる。深さから表面の生産へ向かうのが動的発生であるのに対して、表面上の出来事から出発するのが「静的発生」である。静的発生は、出来事の、物的なものへの「実現〔effectuation〕」である⁵³。ストア派を援用する点、非物的なものと物体とを区別する点、前者に出来事を後者に能動・受動とを配する点など、確かに『千のプラトー』の議論は、『意味の論理学』の議論を継承する。しかし、重要な違いがある。1) まず、物体への実現（『意味の論理学』）は、個体の発生であり、物体に出来事を述語として帰属させることである⁵⁴。ここには、『差異と反復』における個体化の肯定的側面は存在しない。実現は、出来事の普遍的連絡である「反実現〔contre-effectuation〕」に対するものである⁵⁵。それに対して、物体への帰属（『千のプラトー』）には、このような物体の実現の特徴が見られない。むしろ、反実現の特徴のほうが見られる。2) 次に、言表あるいは表現は、非物的変容を表現するが、『意味の論理学』には、この考えは見られない。出来事は言語を可能にするものとされる⁵⁶。表現はむしろ、『差異と反復』、『意味の論理学』などで重要な役割を担わされてい

52 *Ibid.*, p. 110. 吉澤, 「ドゥルーズにおける出来事 — ホワイトヘッドとともに — 」, 『津田塾大学紀要』第43号, 2011年, pp. 303-328.

53 *Logique du sens*, pp. 13-17, p. 217.

54 *Ibid.*, pp. 134-136.

55 *Ibid.*, pp. 208-209.

56 *Ibid.*, p. 217.

た⁵⁷。例えば『差異と反復』が中心概念とする個体化は、潜在的なものである理念が現働化＝異化することだ。ここで、個体は、自らが現働化した理念を表現するが、理念は、個体の外には実存していない⁵⁸。このように、言表が表現するという考えは存在していない。『意味の論理学』でも、個体自体が否定的に評価されるが、表現概念自体に変化はない。『千のプラトー』では、アジャンスマンの表現は非物体的なものを表現するが、地層の表現はそうではない。『千のプラトー』の、内容に対する表現は、『差異と反復』などにおける表現とは異なる。表現は「神の栄光を歌う」⁵⁹。

表現が、地層的アジャンスマンも含む地層全体に関わるのに対して、言語あるいは記号は、人間的地層上のアジャンスマンにしか関わらない。「諸地層の総体を貫通する記号の体系は明らかに、存在しない。象徴化に理論的に先立つものとして仮定される記号的「コーラ [chora]」という形でも存在しない⁶⁰」。『千のプラトー』によれば、記号を表現にまで安易に拡張するべきではない。つまり、分子に対するモル（無機物の表現）も、タンパク質に対する遺伝子（有機物の表現）も、記号ではない。この著作は「言語の帝国主義」に反対している。記号の体制は、4つに分けられている。1）「プレシニフィアンの体制」（「原始社会」）、2）「シニフィアンの [signifiant] 体制」（「国家装置」）、3）「逆シニフィアンの [contre-signifiant] 体制」（「戦争機械」）、4）「ポストシニフィアンの体制」（主体化 [subjectivation]）⁶¹。これらの記号の体制は、『アンチ・オイディプス』の「未開」、「野蛮」、「文明」から出発して展開された⁶²。

57 *Différence et répétition*, p. 68. 吉澤, 「ドゥルーズの個体化 — ライプニッツを中心に — 」, 『仏語仏文学』第45号, 2012年, pp. 107-127.

58 *Différence et répétition*, p. 325, p. 335.

59 *Mille plateaux*, p. 58.

60 *Ibid.*, p. 84.

61 *Ibid.*, p. 168, pp. 141-169, pp. 482-484, etc. 『意味の論理学』の反実現の場合同様, contre には対立の意味だけではなく, 近接の意味もある。吉澤, 「『千のプラトー』における「歴史」哲学」, 『津田塾大学紀要』第47号, 2015年, pp. 217-239.

62 Deleuze, Guattari, *L'Anti-Œdipe*, Minuit, 1972, pp. 311-312.

言わば、シニフィアンの体制は言表行為のアジャンスマンの形相に、ポストシニフィアンの体制はその実体に、それぞれ相当する。一つの地層は、形相の諸傍層と、実体の諸重層とからなるとされたが、ここでもそれが当てはまり、傍層と重層とがこれまでになく自律的地層であるほどである。表現と内容という二重分節だけではなく、形相と実体、傍層と重層という対もまた、『千のプラトー』では、多様なあり様を示している。

これら「アジャンスマンの表現と内容」の二つの側で、諸重層と諸傍層は、重畳する諸度合と隣接する諸形相は、これまでになく、自律的な諸地層自体としての価値を持っている。我々が、二つの記号の体制をあるいは二つの権力の形成体を区別できたら、それらこそが実際に、人間的群〔population〕における二つの地層であると我々は言おう⁶³。

「二つの記号の体制」とは、シニフィアンの体制とポストシニフィアンの体制である。これらの二つの体制は、第5、第7、第12、第13プラトーで詳述される。「人を拘束する主要な地層は、有機体であるが、シニフィアンス〔signifiante〕と解釈、主体化と服従〔assujettissement〕もまたそうである⁶⁴」。「シニフィアンス」、「解釈」はシニフィアンの体制、「主体化」、「服従」はポストシニフィアンの体制である。『千のプラトー』は、記号に反対するが、端的にはシニフィアンスに、シニフィアンの体制に反対している。

すべての地層の中に記号を持ち込む、あるいはすべての記号の中にシニフィアンを持ち込む — （たとえ極限において記号なしですますことにさえなっても） — 拡張的方法よりも好ましいのは、それゆえ、厳密に限定的な方法である。〔1〕第一に、記号を伴わない表現の諸形相がある（例えば、遺伝子コードは言語とは何の関係もない）。〔中略〕〔2〕ついで、我々は記号の諸体制をこうした限定的な意味で

63 *Mille plateaux*, pp. 82-83.

64 *Ibid.*, p. 167.

考察するが、その際、それら〔記号の諸体制〕はシニフィアンではないと、あるいは必ずしもシニフィアンではないと我々は見ている。記号が、地層のある特定のグループ〔＝人間的地層〕上での表現のある種の形相化しか指示しないのと同様に、シニフィアンスそれ自体は、この個別的形相化における、数ある体制のうちの一定の体制〔＝シニフィアンの体制〕しか指示していない。非記号的なあるいは記号なき表現があるのと同様に、非記号学的〔asémiologique〕記号の体制が、非シニフィアンの記号が、諸地層上にまた存立平面上に存在する⁶⁵。

通常、記号はシニフィアンスに、表現は記号に、還元されてしまう。例えば、遺伝子コードは、記号と考えられ、記号ゆえに、そこには、言語をモデルとしたシニフィアン・シニフィエの関係しかないと考えられる。このような単純化がこの著作では慎重に退けられている。表現、記号、シニフィアンスはこのように配分されている。

2 内在から超越へ ― 出来事から実体・形相へ

存立平面

一つの身体は、それを規定する形相によって定義されているのではない。規定された実体ないし主体、として定義されているのでもない。この身体が所有する器官によって、あるいはこの身体が行使する機能によって、定義されているのでもない。存立平面上で、一つの身体は、専ら経度と緯度とによって定義されている⁶⁶。

第10プラトーは、上述したように、組織と展開の平面、つまり超越平面だけではなく、存立平面、つまり内在平面についても述べている。引用部分は、ドゥ

65 *Ibid.*, p. 87. 「記号学〔sémiologie〕」は「シニフィアンの記号系」とされる。*Ibid.*, p. 140.

66 *Ibid.*, p. 318. 強調は著者らによる。

ルーズによるスピノザ哲学が提示されている箇所だ。「身体」は、器官なき身体であり、存立平面上に定位されている。「規定する」という語は、述語付けるとのことだ。形相なら、身体を述語付けることになるが、そのような形相は、そこにはない。また、「実体ないし主体」はまさに、形相によって述語付けられる実体ないし主体であるが、身体は、そのような「実体ないし主体」でもない。この引用には、主語としての実体と、形相としての述語とからなる関係がよく現れている。そして、「一つの身体は、専ら経度と緯度とによって定義されている」。経度と緯度は、ドゥルーズが、自らのスピノザ哲学を提示するために、中世あるいは地理学から借用した用語である⁶⁷。経度と緯度は、実体と形相ではない。要は出来事である⁶⁸。

超越は形相と実体からなった。また、既に超越とはいえないアジャンスマンにおいても、超越的なもの（シニフィアンの体制とポストシニフィアンの体制）が残っていた。組織と展開の平面は存立平面に対立した。

そして、[組織と展開の平面とは] 全く別の平面が、あるいは平面についての全く別の考え方が、存在する。ここには、形相は、あるいは形相の展開は、もはや全くないし、主体も、および主体の形成も、もはやない。発生がないように構造もない。[中略] この平面は、経度と緯度、速度と此性しか知らないが、この平面を我々は（組織と展開の平面に対立させて）存立のあるいは合成の平面と呼ぶ。これは必然的に、内在性のおよび一義性の平面である⁶⁹。

存立平面には実体（主体）と形相とはない。実体（あるいは内容）に対応する発生も、形相（あるいは表現）に対応する構造も、ない。「経度と緯度」が、

67 Deleuze, *Spinoza Philosophie pratique*, p. 171, Minuit, 1981.

68 「一つの身体に、運動・静止の、速さ・遅さの特定の諸関係の下で、所属する質料的諸要素の総体（これが経度である）。一つの身体が、特定の能力の下で、あるいは、特定の度合いの力能の下で、受け入れることのできる強度的諸情動の総体（これが緯度である）」。*Mille plateaux*, p. 318.

69 *Ibid.*, p. 326. *Ibid.*, pp. 632-633.

言い換えれば「速度と此性」が、要は出来事が、存立平面をつくる⁷⁰。存立平面（合成平面）は、内在平面、一義性平面でもある。

通俗的に考えるなら、実体（主体）と形相とが認められなければ、そこに差異は全く存在しないことになる。つまり、実体の哲学、主体の哲学を退けると、差異なき無底の哲学しか残らないことになる⁷¹。存立平面は決して、そのような差異なき無底ではない。実体の個性とは異なる個性をもつ出来事からなる。第11プラトーで、ウジェーヌ・デュプレエルの「強化〔consolidation〕」の理論を援用しながら、ドゥルーズは存立性の概念を明確化しようと試みる⁷²。『千のプラトー』全体を振り返りながら、結論のプラトーは存立平面への登録を列挙する。

存立平面に登録されているのは以下のものである。〔1〕此性、つまり、出来事、それ自体として把握された非物体的変容。〔2〕ノマド的な本質、つまり曖昧な、しかし厳密な本質。〔3〕強度の連続体〔continuum d'intensité〕、つまり、連続的変異〔variation continue〕 — これらは定数と変数を超えている — 。〔4〕生成 — 項も主体ももたないが、ただし、そのどちらをも隣接のあるいは非決定性のゾーンに導いている — 。〔5〕平滑空間 — 条理空間を通じて合成されている — ⁷³。

引用箇所は原文でセミコロンを介して列挙される。これらは外延を等しくするものである。本稿は、出来事を若干拡張してこれら全体を指し示すために用いている。地層に対する存立平面を説明するには、『哲学とは何か』における

70 出来事と内在平面との違いは以下参照。Qu'est-ce que la philosophie ?, pp. 38-39.

71 Logique du sens, pp. 129-130. 「形而上学」は実体の哲学, 「超越論哲学」は主体の哲学である。

72 Mille plateaux, pp. 405-406.

73 Ibid., p. 633. 強調は著者らによる。「強度の連続体」は、地層にとっての存立平面を構成する。例えば以下参照。ノマド的な本質: Ibid., pp. 454-455. 強度の連続体: Ibid., p. 90. 生成: Ibid., pp. 359-360. 平滑空間: Ibid., p. 607-609.

「内在平面」さらに「カオス」に立ち入る必要がある⁷⁴。

地層化

地層は、地球上つまり大地上で生じた。大地とは、器官なき身体、存立平面、つまりは内在平面であった。地層は組織と展開の平面、超越平面であった。つまり超越平面は、内在平面上で生ずる。超越は内在に由来する。超越に材料を提供するのは、内在である。大地は「形相化されていない不安定な質料」である。内在は質料である。ただし、ここでいう内在の質料は、質料つまり素材と通常考えられているものとは異なる。通常、単なる素材は、そこに、力、エネルギーあるいは強度のようなものがあるとは考えられない。しかしここでいう内在の質料はそうではない。質料は、ある箇所では、「あらゆる方向の流れ」、
「自由状態の強度あるいは放浪する特異性」、
「狂気のあるいは過渡状態の粒子」として、別の箇所では、「分子以下かつ原子以下の素粒子」、
「純粹状態の強度」、
「物理現象・生命現象以前の自由な特異性」として、形容されている⁷⁵。自然科学によって対象化される以前の、形相なき純粹な質料は、無力なものの反対である。

地層こそが内在に形相を与えている。

[1] 地層は、質料に形相を与えること、共鳴・冗長性〔redondance〕のシステムのうちに、強度を閉じ込めること、あるいは特異性を固定すること、大地という身体上で、大きな — 程度の違いはあれ — 分子を構成すること、そして、それらの分子をさらにモル状の集合へと組み入れてゆくこと、にある。[2] 地層とは捕獲〔capture〕であり、言わば、圏内を通過する一切のものを引き止めようとする「ブラックホール」あるいは閉塞である。[3] 地層は、この大地上でコード化と領土化とによって作用している。コードと領土性とによって同時に進行している。[4] 地層は神の審判であり、一般的地層化はまさに神の審判の体系全体である（[5]

74 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, pp. 44-45, pp. 111-112, p. 144-146.

75 *Mille plateaux.*, p. 54, p. 58. *Ibid.*, p. 92, p. 633, p. 638.

しかし、大地は、あるいは器官なき身体は、審判を回避し、逃走し続けて、そして、脱地層化し、脱コード化し、脱領土化し続けている)⁷⁶。

[1] では、大地上のものが具体的にどのように自然科学の対象になってゆくかを、つまり地層化されてゆくかを、ミクロからマクロという順で述べている。[2] の「捕獲」という術語は、『千のプラトー』で、国家装置（シニフィアンの体制）が、戦争機械つまり内在、に対して行うものの意味で多用されるが、ここでは、言わば自然学的な意味合いで使われる。ブラックホールはポストシニフィアンの体制に関わるが、同様に地層の意味で使われる⁷⁷。[3] の、コード化、コードは、形相に、領土化、領土は、実体に、概念的に近い。超越は、内在を形相化するが、内在を完全に形相化し尽くすことはできない。つまり捕獲は常になされるが、それを免れるものも常にある。逃走、脱地層化、脱コード化、脱領土化は常に行われる⁷⁸。[4]、[5] より、超越たる神と、内在たる大地との対比は明らかだ。神は、捕獲・ブラックホール・閉塞である地層によって、自由な大地を閉じ込めようとするものの、それは完全にうまくゆくことはない。しかし、見落としてならないのは、大地、内在が、神、超越に対して一次的であるということだ。神は大地から生まれる。

上述したように、地層という超越は、変わらないものとしての合成の統一をもつ。どの地層にも、素材、実体、形相がある。確かに地層は、変わるものとしての諸重層と諸傍層とに断片化される。相変わらず諸重層は実体に、諸傍層は形相に、相当する。また、それぞれの地層は、他の地層に対して基層の働き

76 *Ibid.*, p. 54. *Ibid.*, p. 92, p. 627. 「冗長性」は通常、無用性、余剰性を意味するが、独自の意味で使われる。シニフィアンの体制とポストシニフィアンの体制とに (*Ibid.*, p. 166.), さらにダイアグラム (内在) にも (*Ibid.*, p. 168.) 関係付けられる。始めも終わりもない反復性を意味するように見える。引用では地層の意味で使われる。

77 捕獲: *Ibid.*, p. 555, etc. ブラックホール: *Ibid.*, pp. 205-206, etc. ブラックホールに対するホワイトウォールはシニフィアンの体制に関わる。

78 三種類の線を提示する第9プラトー「ミクロ政治学と切片性」で、1)「比較的柔軟な線」、2)「硬質な線」に対して、逃走線が概念化される。*Ibid.*, p. 271, etc.

をする。つまり存立平面上で、地層は文字通り、形相によって述語づけられた実体として重なる。地層は、無機物、有機物、人間からなる。存立平面上に、無機物、有機物、人間という順序で地層が形成されているかのようだ。

このように、内在平面上の超越は一見するに、進化的秩序をもっているかに見える。内在平面という質料に形相が与えられて、形相化された実体が生ずる。形相－実体、形相－実体...という風に積み重ねられて、地層という超越が発展させられているかのようだ。しかしながら、『千のプラトー』で進化はたえず否定されている。「しかし基層は確かに、単なる基体〔substrat〕と見なされるべきではない。とりわけ基層は、より複雑さに欠ける、あるいは下等な組織をもっているわけではなく、また、あらゆるばかげた宇宙的進化論を警戒しなくてはならない⁷⁹」。ドゥルーズは、タルドであれ、ベルクソンであれ、ホワイトヘッドであれ、リュイエであれ、シモンドンであれ、広義の進化の哲学を援用するが、その際、そこに伏在する進化的秩序を無効化しようとする⁸⁰。質料たる内在平面から、形相－実体が積み重なるように超越という建造物がつくられているかのように一見見えながら、このような構築性は退けられている。ドゥルーズの哲学的課題は、真の意味でのいかなる種類の因果性あるいは合目的性も排除しながら、ある程度因果性あるいは合目的性も成立するかのように見える我々の経験が記述できる視座も確保しようとするところにある。

抽象動物

超越は内在を質料にしてつくられるが、超越は内在上で進化するように形成されているわけではない。博物学者ジョフロア・サン＝ティレールによれば、有機的地層には様々な動物種が存在するが、どの動物種の形相も、折り畳みによって別の動物種の形相に移行させることができる。「〈脊椎動物〉から〈頭足

79 *Ibid.*, p. 65. *Ibid.*, p. 62, p. 89, p. 147, p. 149, pp. 534-538, p. 627. 進化は生成ではない。この点は *Ibid.*, pp. 291-292.

80 ホワイトヘッドは以下で取り上げた。吉澤, 「ドゥルーズ『襞 — ライプニッツとバロック —』のホワイトヘッド」, 『桜文論叢』第101巻, pp. 25-69, 2020年。

類〉[イカ、タコなど]に移るには、〈脊椎動物〉の脊柱の二つの部位を近づけなさい、頭部を足の方へ、骨盤を項の方へ、もってゆきなさい⁸¹」。

有機的地層は、特有の生命的質料を全くもっていない。というのは、質料はどんな地層にとっても同じだからである。しかし、それ[有機的地層]は、特有の合成の統一を、唯一の同じ抽象〈動物〉を、地層の内部に捕えられた唯一の同じ抽象機械を、もち、そして、[1] 同じ分子的素材、[2] 器官の同じ解剖学的要素あるいは成分、[3] 同じ形相的連結〔*connexion*〕を示している⁸²。

進化的秩序に従えば、有機的地層は、無機的地層を素材とすることになるが、ここで問われているのはそれではない。有機的地層に特有の生命的質料が存在するのではない。質料は、有機的地層に限らず、すべての地層にとって同じとされる。つまり有機的地層も、存立平面（内在）という質料からつくられている。有機的地層が有機的地層であるのは、唯一の抽象動物がすべての地層にとって同一の質料（つまり内在平面）との関係において実現されているからだ。有機的地層には、抽象動物の合成の統一がある。つまり、1)「同じ分子的素材」、2)「器官の同じ解剖学的要素あるいは成分」（実体に相当）、3)「同じ形相的連結」。有機的地層がそれとして存在するのは、内在平面上に、無機物、有機物、人間という順序で、つまり進化的秩序によって、地層が積み上げられるように形成されているからではない。

脊椎動物をタコに折り曲げるジョフロア・サン＝ティレールは生物種の進化を主張して、一方、それに異を唱える動物学者キュビエは種の不変性に与するかのようにも見えるが、ここで問題になっているのは、生物種の進化ではない。

同一の抽象〈動物〉が、[有機的]地層全体で実現化されている〔*se réaliser*〕。た

81 *Mille plateaux.*, p. 61. ジョフロア・サン＝ティレールは『差異と反復』で取り上げられている。*Différence et répétition*, pp. 278-279.

82 *Mille plateaux.*, p. 61.

だし、多様な度合で、多様な様相の下で、その都度可能な限り完璧に — 周囲・環境との関係で — ，実現化されている（ここで問題なのが明らかに進化なのかと言えばまだそうではない。つまり折り畳みは、度合は、血統あるいは派生を意味していない。単に同じ一つの抽象物〔抽象動物のこと〕の自律的実現化を意味しているにすぎない）⁸³。

キュビエは、相互に異なる個々の生物を「同一の抽象動物」の実現として捉えることはしない。生物間あるいは器官間に類似あるいは類比を見るだけであり、生物種の境界線を超えることはない。一方でジョフロア・サン＝ティレールにとって、個々の有機物は、抽象動物が「発達のあるいは完成の様々な度合い」において実現するものだ。上の引用にあるように、問われているのは、地層における進化ではなく、内在からの超越としての実現だ。

抽象動物は、有機的地層における合成の統一を示す。ただし上述したように、合成の統一は、有機的地層だけにではなく地層全体に妥当する⁸⁴。抽象動物を有機的地層だけではなく地層全体に一般化したものが、抽象機械である⁸⁵。抽象機械は言わば存立平面に直に面している。有機的地層に関する議論において、民族学者マルセル・グリオール語るドゴン族の伝承が援用される。

衝撃で、大槌と鉄床が、彼〔鍛冶師〕の腕と足を肘と膝のところでへし折った。この肘と膝は、それまで彼にはついていなかったのだ。こうして彼は、人間という新たな形相に固有の関節〔肘と膝のこと〕〔articulations〕をもつようになったが、この形相は、後に地上に広まることになっていて、また労働に定められていた。（…）彼の腕は労働のために折れまがっていた⁸⁶。

83 *Ibid.*, p. 62.

84 *Ibid.*, p. 66.

85 『アンチ・オイディプス』からの機械概念の変容を検討することなしには『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』との関係は不明なままだ。「欲望する機械」の放棄は以下参照。 *Dialogues*, pp. 121-123.

86 *Mille plateaux*, p. 56.

大鎚と鉄床によって鍛冶師の身体に関節がつくられる。それと同様に、機械状アジャンスマンによって、つまり抽象機械によって、器官なき身体つまり存立平面に言わば直接、有機的地層はつくられる。そしてこの伝承の射程は、有機的地層にとどまらない。すべての地層に妥当する。存立平面上に積み重ねられた諸地層は確かに、進化的秩序に従ってつくられているかのように見えるが、実際には、機械の一撃でできている。

高度な脱領土化

様々な地層は、存立平面上にそれぞれ積み重ねられているかのように見えた。それと同様に、地層上にアジャンスマンは積み重ねられているかのように見える。アジャンスマンはまずこの意味で領土的であった。地層におけるのと同様、そこには内容と表現との分節があった。機械状のアジャンスマンと、言表行為のアジャンスマンである。言表行為のアジャンスマンには、シニフィアンスの記号の体制と主体化の記号の体制があった。上述したように、『千のプラトー』にはこの二つの記号の体制を有機体とともに地層と述べている箇所もあるほどである。これらの記号の体制は地層的、つまり超越的である。アジャンスマンにおける言わば、傍層と重層、つまり形相と実体である。

しかしながら、これらの記号の体制は決して静的なもの、固定的なものではない。それどころではない。既に地層においても脱コード化、脱領土化が行なわれていたが、記号の体制では、高度な脱領土化が行われることになる。

[1] 〈脱〔D〕〉 [= 〈脱領土化〉] は、これを埋め合わせる再領土化によって覆われることがある。その結果、逃走線は、封鎖されたままである。この意味で、〈脱〉は否定的であると言われる。どんなものも、再領土化の役割を果たすことができる。つまり、失われた領土の「代わりになる」ことができる。[中略] 記号の諸体制のなかで、シニフィアンの体制は確かに〈脱〉の高度な段階に達している。しかしこの体制は、逃走線を封じていて、そして否定的な〈脱〉しか存続することを許していない。なぜなら、この体制は同時に、シニフィエへの、シニフィアンそのもののへ

の、再領土化のまったきシステムを作用させているからだ。〔2〕別のケースが提示されるのは、〈脱〉が肯定的なものに生成する時だ。つまり、〈脱〉が、再領土化 — もはや二次的な役割しか演じていない — を通じて、肯定されるが、まだ〈脱〉が相対的なものに留まっている時である。これは「この時〈脱〉が相対的に留まっているのは」、〈脱〉が引いている逃走線が、切片化され、相継起する「プロセス」に分割され、諸々のブラックホールに陥り、あるいは、一般化されたブラックホール（カタストロフ）に行き着きさえするからである。これは、情念的かつ意識的〈脱〉をとまなう、主体的記号体制のケースである。この〈脱〉は肯定的であるが、相対的な意味においてのみそうである⁸⁷。

第5プラトール「いくつかの記号の体制について」は、上述の四つの記号の体制を、殊に、シニフィアンの体制とポストシニフィアンの体制とを、主題とする。シニフィアンの体制の一般的公式は以下の通りだ。「記号は記号に関わり、しかも無限に記号に関わる」。シニフィアンの体制で記号は、「記号から記号への絶え間ない参照における象徴」である⁸⁸。記号は脱領土化、再領土化、脱領土化…を際限なく繰り返す。これこそが「高度な脱領土化」である。そしてシニフィアンの体制では、シニフィアンとしての、記号のこのような「組織網」は、「不定形な連続体」をシニフィエとする。「解釈」という契機を経ることで、シニフィエは一変する。「一記号にまたは記号の一集団に、我々は、合致したものとして、それゆえに認識可能なものとして、規定されたシニフィエの一部を、対応させることになる⁸⁹」。さらに、記号から記号への無限な参照は、記号全体の「主要なシニフィアン」への関与を前提とする。主要なシニフィアンは、「シニフィアンの中心」、「〈シニフィアン〉そのもの」、「シニフィアンの形相的で純粋な冗長性」とも呼ばれる⁹⁰。第5プラトールを垣間見ることで、記号の無

87 *Ibid.*, p. 634. 著者ら強調。

88 *Ibid.*, p. 141. 象徴は「脱領土化された記号」である。*Ibid.*, p. 84.

89 *Ibid.*, p. 143.

90 *Ibid.*, p. 144.

限な組織網が、高度な脱領土化でありながら、それと同時に「シニフィエへの、シニフィアンそのものへの再領土化のまったきシステム」を作用させていることが分かる。

シニフィアンの体制では、「贖罪の山羊」は、「シニフィアンの体制が我慢することのできない逃走線を、つまり絶対的な脱領土化を、体現している⁹¹」。絶対的脱領土化は、シニフィアンの体制が封じ込めなければならないものであり、否定的にしか規定することができないものだ。ポストシニフィアンの体制では、贖罪の山羊という逃走線つまり脱領土化は、「肯定的な価値を受け取る⁹²」。脱領土化は「肯定される」が、「相対的なものに留まる」。ポストシニフィアンの体制は、主体的記号体制であり、「有限的諸プロセスの線形的かつ時間的な継起」によって定義される⁹³。「主体化は、逃走線に対して、切片性 — これ〔逃走線〕を絶えず否定する — を、絶対的脱領土化に対して、廃絶の点 — これ〔絶対的脱領土化〕を絶えず堰き止め、方向転換させる — を、強制する⁹⁴」。

このように、シニフィアンの体制は否定的な脱領土化、主体化の体制は肯定的な相対的脱領土化、であるという違いはあるが、いずれも高度な脱領土化である点では変わらない。これが可能なのは、内在平面があるからに他ならない。内在が超越に権利的に先行するからだ。

抽象機械

記号の体制のなかには、領土的、地層的なものがあった。その一方で、本来

91 *Ibid.*, p. 146.

92 *Ibid.*, p. 152. シニフィアンの体制は古代エジプトに、ポストシニフィアンの体制は古代ユダヤに、対応させられているかのようなのであるが、第5プラトーの記述はそれほど単純ではない。そこでも「私達は歴史を行っているのではない」と明言される。
Idem.

93 *Ibid.*, p. 150.

94 *Ibid.*, p. 167. 結論とは異なり、第5プラトーは、主体的記号体制を否定的絶対的脱領土化に、シニフィアンの体制を相対的脱領土化に、する。*Ibid.*, pp. 168-169, p. 211.

的により脱領土化的傾向をもつ記号の体制もある。逆シニフィアンの記号の体制、つまり戦争機械である。戦争機械は単にノマドに帰せられるものであるだけではない⁹⁵。科学、思惟、宗教、マイノリティなど様々なものに変貌する⁹⁶。戦争機械は、国家装置がそうであるよりも抽象機械に近い⁹⁷。つまり存立平面に内在に近い。戦争機械は、内在の性格を分有する。本来的に内在に由来する。戦争機械と国家装置との対立は、内在と超越との対立を反映する。上述したように、アジャンスマンは地層上にあるだけではなく、存立平面からつくられた。存立平面上の非身体的変容は、表現あるいは言表によって表現され、内容に帰属させられる。どのアジャンスマンも（つまり領土的なアジャンスマンも）、決して地層だけに由来するわけではない。内在なしにはアジャンスマンはつくられない。それどころか本来的には、アジャンスマンは、抽象機械と存立平面に由来する。地層は、抽象機械と存立平面から言わば一挙につくられたが、アジャンスマンも同様だ。機械と身体とに関するドゴン族の話はここにも妥当する。存立平面上に地層、地層上にアジャンスマンという風に、進化的秩序によって構築されているかに見えて、地層もアジャンスマンも、その都度、機械による身体への衝撃によってつくられる。抽象機械と存立平面は、地層とアジャンスマンに権利的に先行する。

まず抽象機械は、プラトンのアイデアではない。「プラトンので超越的かつ普遍的で永遠的〈アイデア〉」としてあるような抽象機械は存在しない⁹⁸。抽象機械の抽象性は、アジャンスマンの具体性に対する。抽象機械は、「アジャンスマンの中で作動している⁹⁹」。抽象機械は、アジャンスマンに対して、超越的で

95 *Ibid.*, p. 471.

96 以上は戦争機械を主題とする第12プラトー「ノマド論：戦争機械」に詳しい。*Ibid.*, p. 446. また以下も参照。吉澤, 「『千のプラトー』における「歴史」哲学」。

97 *Mille plateaux*, p. 639.

98 「第一の意味で、プラトンのにして超越的、かつ普遍的にして永遠的〈アイデア〉のような抽象機械なるもの〔la machine abstraite〕も、また〔同様な〕諸抽象機械〔des machines abstraites〕も、存在しない」。 *Ibid.*, p. 636. *Ibid.*, p. 177.

99 *Ibid.*, p. 636.

はなく、内在的である。個々のアジャンスマンの中で作動するという意味で、普遍的ではなく特異的だ。そしてアジャンスマンの脱領土化の側面と関係する。アジャンスマンの中で作用する抽象機械は、そのアジャンスマンを「他のものに向けて開いている」。これこそが「生成」をつくりだす¹⁰⁰。

地層、領土的アジャンスマンには実体と形相とがあったが、抽象機械にはそれらは存在しない。上述したように、抽象機械はプラトンのアイデアではない。通俗的に理解されるアイデアはむしろ形相（根本的形相であるカテゴリー）のほうであろう。もちろんその場合、形相は実体から独立に存在する必要がある、この限りでは『千のプラトー』のいう形相（実体とセットになっている）とは異なる。上述したように、抽象機械の抽象性は、アジャンスマンの脱領土化の側面に基づいている。言わば、『千のプラトー』には二つの具体－抽象の系列があることになる。地層における形相の抽象性（通常はこちらを抽象的なものと呼ぶはずだ）と、アジャンスマンにおける脱領土化の抽象性である。『千のプラトー』で言われている抽象は、後者の抽象である。

抽象機械は具体的なアジャンスマンとの関係で抽象的である。そして抽象機械はアジャンスマンに内在している。それは決して、唯名論における普遍、つまり単なる名辞、のようなものではない。一方で抽象機械は、存立平面、地層、領土的アジャンスマンという系列の限界でもある。存立平面上に地層、地層上に領土的アジャンスマンがあり、この領土的アジャンスマンと関わるのが、抽象機械である。言わば、地層と領土的アジャンスマンとが、存立平面と抽象機械とによって挟まれている。形相と実体は、地層と領土的アジャンスマンとを貫くが、存立平面は、形相化されていない質料である。形相・実体の系列の一方の限界に、存立平面がある。他方の限界に抽象機械がある。言わば、形相化ではもはやないが、形相化の限界に抽象機械がある。正確には抽象機械は、存立平面を含んでいる。「抽象機械は、形相化されていない質料と、形相的でない機能とからなる。各々の抽象機械は、質料－機能の、強化された集合（系統

100 *Ibid.*, p. 637. *Ibid.*, p. 181.

流〔phylum〕およびダイアグラム〔diagramme〕である¹⁰¹。」「形相化されていない質料」，「系統流」は，言うなれば，実体の極限に，「形相的でない機能」，「ダイアグラム」は，形相の極限に，ある。ここでは，形相化されていない質料たる存立平面も含む形で，抽象機械が規定されている。第3プラトーでは，無機物などの地層はいずれも，実体，形相の他に，素材をもっていたが，そのもっとも一次的な素材，つまり質料が，大地，存立平面とされた。第12プラトーでは，人間の技術との関係で，もっとも一次的な素材，つまり技術的な「質料」，として，「機械状系統流」という概念が提示される¹⁰²。またダイアグラムは，超越の側のプログラムから差別化されたものとして，抽象機械に位置づけられている¹⁰³。

抽象機械には実体と形相そのものはないが，それぞれ実体と形相とにつながるもの（系統流とダイアグラム）はある。表現と内容に関して，『千のプラトー』は一層精妙な議論を行うが，この点に関しても，実体と形相の場合とほとんど同様である。正確には，抽象機械には実体と形相がない以上，表現と内容もありえないが，表現と内容それぞれにつながるものがある。「しかし別の観点から捉えるなら，〔表現と内容との〕区別は存続し，そして，特徴という状態で再創造さえされていると言えるだろう。〔つまり〕内容の諸特徴（形相化されていない質料，あるいは強度）と，表現の諸特徴（形相的ではない機能，あるいはテンソル）とが存在するということだ¹⁰⁴」。形相と実体のそれぞれの限界，表現と内容のそれぞれの限界は，抽象機械において重なっている（形相化されていない質料，形相的ではない機能）。

つまり，実体と形相，表現と内容という観点から考えると，抽象機械こそが，存立平面までも合成する本来的に内在的なものであることが分かる。勝義の抽象機械がまず，自らと存立平面とを合成する。「同時に，抽象機械なるものは，

101 *Ibid.*, p. 637. 強調著者らによる。

102 *Ibid.*, pp. 506-507, etc.

103 *Ibid.*, p. 179.

104 *Ibid.*, p. 638. 強調著者らによる。

自らを合成すること，そして，存立平面を合成すること，が必要であった¹⁰⁵」。次のような順序で展開される。1) 勝義の抽象機械，2) 抽象機械および存立平面（形相的ではない機能＝ダイアグラム，形相化されていない質料＝系統流），3) 地層およびアジャンスマン。これは，勝義の抽象機械だけが最初に真に存在して，それから抽象機械・存立平面の段階へなどという風に展開するわけではない。この順序で時間的に継起するわけでもない。これは『千のプラトー』で繰り返されるように進化ではない。相対的脱領土化だけではなく絶対的脱領土化も存在するが，絶対的脱領土化は，ほとんど抽象機械の，存立平面の異名と言っていい¹⁰⁶。内在から超越が派生するだけではなく，内在の中のもっとも内在的なものが内在自体をつくる。実際，『哲学とは何か』では抽象機械は内在平面に重ねられる¹⁰⁷。地層とアジャンスマンとによる進化的秩序があるように見えて，実は抽象機械と存立平面が，結局は抽象機械があるにすぎない。つまり，「ひと〔on〕は，形相化されない質料という実在的なもの〔＝存立平面〕の上に直に書き，同時に，この質料は，非形相的な言語全体〔＝抽象機械〕を貫いてかつ緊張させている¹⁰⁸」。身体（器官なき身体，つまり存立平面）に構築物が築き上げられるのではない。見た目に反していかなる種類の因果性も合目的性も成立していない。身体に直接大槌が打ちつけられる。投げられる骰子の偶然性も同じことを語っている¹⁰⁹。

超越が内在によってつくられているということから，非常に重要な帰結が導き出される。超越に対立しているはずの内在には，超越をつくりだす，言わば超越的なものが既にあるということになる。抽象機械には三つの類型がある。1) 存立性の抽象機械。2) 地層化の抽象機械。3) 超コード化的あるいは

105 *Ibid.*, p. 637.

106 結論のプラトーは『千のプラトー』の構図をよく示す。そこで脱領土化の節が抽象機械の節の直前にある点は重要だ。*Ibid.*, pp. 635-636.

107 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, p. 39.

108 *Mille plateaux*, p. 638.

109 ドゥルーズが好んで取り上げるニーチェ流の骰子一擲は以下で論じた。吉澤，「ドゥルーズの賭け ― 『差異と反復』を中心に ― 」。

「公理的 [axiomatique]」抽象機械。要は、第一の抽象機械は内在に、残り二つは超越に、対応している。第二は地層に、第三はアジャンスマンに、対応するが、第三は正しくはアジャンスマンを閉じる働きのみを受け持つ。アジャンスマンの創造性は第一による。第三は詳しくは「命令語 [mot d'ordre]」の機械、「顔貌性」の機械、「隷属 [asservissement]」の機械である¹¹⁰。

3 超越から内在へ — 実体・形相から出来事へ

超越は内在によってつくられる。ここから、実践に関する重要な帰結が導き出される。超越から実践を志向する場合、内在がその基準になる。しかもこの場合、本来的に内在的な内在こそが、その価値基準になる。

アジャンスマンは、[1] 諸連結を開きかつ多様化するほど、そして[2] 存立平面 — それ[存立平面]の、強度・強化の量記号 [quantificateur] を伴う — を描くほど、それだけますます、生きた抽象機械に近づく。しかし、創造的な連結に代えて、閉塞する接合 [conjonction] (公理系) を、地層をつくる組織 (地層系 [stratomètre]) を、ブラックホールを穿つ再領土化 (切片系 [ségmentomètre]) を、死の線への逆転 (破壊系 [déléomètre]) をもたらすに依じて、それは、生きた抽象機械から遠ざかる¹¹¹。

「生きた抽象機械」は、「純粹と想定された抽象機械」とも言われるが、「抽象機械なるもの」である。言い換えればそれは、存立性の抽象機械、本来的に内在的な内在、に他ならない。この勝義の内在からの距離によって、個々のア

110 *Mille plateaux*, p. 640-641. 「[1] 命令語の機械は、言語を超コード化し、[2] 顔貌性の機械は、身体と、頭部 [tête] さえも超コード化し、[3] 隷属の機械は、大地を、超コード化あるいは公理化している」。命令語は第4プラトー、顔貌性は第7プラトー、隷属は第13プラトーを参照。

111 *Ibid.*, pp. 639-640. 強調は著者らによる。stratomètre は逐語的には地層計などのほうがより正確であろう。「切片系」、「破壊系」も同様だ。

ジャンスマンは評価される。この「アジャンスマンの量的分析」では、内在は、超越に対して超越的なモデルとなっている¹¹²。「連結」と「接合」は一般には混同されかねないが、「連結」は存立性の抽象機械の創造性に、「接合」は超コード化的あるいは公理的抽象機械の閉鎖性に、結び付けられている。人間における二つの主要なアジャンスマンは、戦争機械と国家装置であった。二つのアジャンスマンのうち、戦争機械のほうが存立性の抽象機械にはるかに近い。戦争機械という名前の由来はここにある。国家装置は、戦争機械の変身の能力を失わせる。エクリチュール、音楽は戦争機械でありうる¹¹³。抽象機械（内在）からの距離がまさに個々の超越を位置づける基準となる。

内在は単に価値基準になるだけではなく、超越からの実践目標にもなる。実践の書『千のプラトー』の、例えば第6プラトーは、そのタイトル通り、「いかにして器官なき身体を獲得するか」を論ずる。このプラトーによれば、司祭は、欲望に三重の呪いを投げかけ、精神分析家もそれに続く。彼らは、「欲望」の中に、1) 欠如という否定的な掟を、2) 快楽という外在的な規則を、3) 幻想という超越的な理想を、刻印した。これらの呪いから欲望を解放するものとして、マゾヒズム、宮廷愛とともに、道教（陰陽道）の性愛的実践があげられている¹¹⁴。

問題は、欲望を内的な欠如として受けとめることではなく、また一種の外化可能な剰余価値を生産するために快楽を遅らせることでもない。逆に、強度的器官なき身体、〈道〉、内在領野を構成することである。ここでは、欲望は何も欠いていないし、それゆえ、どんな外的あるいは超越的指標にももはや関係づけられていない¹¹⁵。

器官なき身体は、存立平面、つまり内在平面（内在領野）と外延を等しいもの

112 *Ibid.*, p. 637.

113 *Ibid.*, p. 639.

114 *Ibid.*, pp. 191-195.

115 *Ibid.*, pp. 194-195.

とされていたが、ここでもそれを確認できる。器官なき身体における欲望は、これらの三つの呪いを免れている。ただし、このプラトーによれば、器官なき身体こそが、欲望に他ならない¹¹⁶。スピノザへの言及の箇所から分かるように、欲望は出来事に他ならない¹¹⁷。また、内在平面の構成が要請されているのは、これらの三つ実践においてだけではない。「内在領野、つまり存立平面は、構築されねばならない。ところで、それ〔存立平面〕は、非常に様々な社会的形成体において、かつ、非常に様々な — 倒錯的、芸術的、科学的、神秘的、政治的 — アジャンスマンによって、構築されうる¹¹⁸」。

それゆえに、〔1〕存立平面上の充実したCsO〔器官なき身体〕と、〔2〕あまりにも暴力的な脱地層化によって、地層の残骸の上で空虚になったCsOとを区別するだけでは、不十分である。〔3〕増殖しはじめた地層の中の、癌のようなCsOをも考慮しなければならない。三つの身体の問題。〔中略〕我々の中のファシストの癌化されたCsOではなく、また、麻薬中毒者の、パラノイア患者の、あるいはヒポコンデリー患者の空虚なCsOでもないCsOを作り出すにはどうしたらよいのだろうか。いかに三つの〈身体〉を区別するのか¹¹⁹。

一般に内在こそが実践目標になる。しかしながら、地層（超越）と存立平面（内在）という区別だけに基づき、脱地層化して内在へ向かえばいいと考えるとしたら短絡的すぎる。安易な内在回帰は、麻薬などによるあまりに暴力的な脱地層化になるが、これでは、「地層の残骸の上で空虚になったCsO」しかもたらさない。地層として、1）有機体、2）シニフィアンス、3）主体化、（さらに4つ目の「社会的形成体」も含めることができる）があげられている

116 *Ibid.*, pp. 203-204.

117 *Ibid.*, pp. 190-191.

118 *Ibid.*, p. 195. 社会的形成体は1）原始社会、2）国家社会、3）都市社会、4）ノマド的社会、5）全世界的組織。*Ibid.*, p. 542.

119 *Ibid.*, pp. 201-202. 著者らによる強調。*Ibid.*, p. 204.

が、これらからの安易な脱地層化の試みが要請されているわけではない。実践における細心の慎重さが求められている。しかしながら、存立平面上の充実した身体（内在）と、地層上の空虚になった身体とを、区別すれば十分であるというわけではない。単に地層に留まればよいということではない。「増殖しはじめた地層の中の、癌のような CsO」にも注意を向ける必要がある。ファシズム、全体主義のような、癌化された地層の増殖は避けなければならない。このように、暴力的脱地層化（死と破滅の線）と、地層の増殖（再領土化）とは退けられている。「三つの身体の問題」は実践上極めて重要である。

おわりに

超越は、進化的秩序によって構築されているように見えるが、そうではない。超越だけがあるのではなく、内在もある。超越は内在に対立するが、内在こそが超越を生み出す。真に存在するのは、内在である。内在こそが、超越を評価する基準になり、また超越からの実践目標になる。以上を『千のプラトー』において確認した。この著作が提示しようとしているのは、徹頭徹尾、つまり、発生のみならず実践においても内在の哲学である。ドゥルーズ哲学における内在への着目自体既に目新しいものではないが、用語の違いはあれ、また、内在（存在の一義性）と超越（存在の類比）との関係の作り方に違いはあれ、ドゥルーズ哲学をすべてこの構図に集約させる点に、論者の立場の賭け金がある。この考えをより説得的にすることが今後の課題である。

最後に、表現と内容という対概念について指摘する。ここにはドゥルーズの哲学的創意がみられる。『差異と反復』は、表象（超越）に権利的に先行するものとして、理念と強度とからなる個体化（内在）という概念を提示する。『意味の論理学』が提示する非物体的なものと物的なものとは、理念と強度とを（前者が理念を、後者が強度を）変容しつつ継承する。また、物的なものから非物体的なものへの発生を内在、非物体的なものの物的なものへの実現を超越、とする。『アンチ・オイディプス』は、非物体的なものと物的な

ものと言わば一体化されたものを、欲望する機械・器官なき身体、つまり、内在とする。ここでは内在から超越への移行は社会体から社会体へと段階的に行われる。この著作の試みを拡張する『千のプラトー』は、内在からの超越化を無機物・有機物という地層も含む形で行う。本稿で見たように、『意味の論理学』の非物体的なものと物的なものとはまた、表現と内容とに（前者は表現に、後者は内容に）展開されるものでもある。『意味の論理学』では、『千のプラトー』の、人間的地層・アジャンスマンの部分しかカバーしていなかったが、『千のプラトー』は、無機的・有機的地層も含む形で理論化する。表現と内容は、『意味の論理学』の対概念から出発したが、それを単純に拡張したものではない。三つの社会体（未開、野蛮、文明）ごとに記号を区別していた『アンチ・オイディプス』に続き、『千のプラトー』は、表現は記号を、記号はシニフィアンスを含む形で、これら三者を区別している。ドゥルーズは、表現が記号に、記号がシニフィアンスに、還元されないようにしている。これは、言語帝国主義、シニフィアン帝国主義をしりぞけるためである。『千のプラトー』では、地層は構造で覆われているが、構造は必ずしも記号あるいはシニフィアンではない。超越は内在から排他的に区別されるのではない。内在からの超越化は、漸進的に、構造の変化とともに行われる。表現と内容との二重分節はこの点に関わる。

表現と内容には、それぞれに実体と形相という対がある。この際、重要なのは、表現と内容との関係が、形相と実体との関係に還元されないことだ。確かに、無機的地層は、モルと分子、有機的地層は、遺伝子とタンパク質、からなっており、決して表現は、内容を述語づけているわけではない。しかしながら、人間的地層において、表現としての言語は、すべての地層と関わりうるようになる。すべての地層は、言語が可能にする意味によって述語づけられる。この段階に至ると、地層は実体であり、それを述語づける意味はその実体の形相であるかのようだ。言い換えれば、人間的地層における表現と内容との関係は、形相と実体との関係であるかのようだ。『千のプラトー』は、そのような還元を認めない。地層において形相と実体との関係に還元されない次元を創出

することが必要である。通常、すべては実体と形相との関係に還元されかねない。ドゥルーズが批判する哲学はまさにそうであった。分析的同一性であれ、総合的同一性であれ、主語としての実体は、形相によって述語づけられる。

『意味の論理学』では、超越論的領野において出来事が生起し、超越論的領野は構造である。構造は、肯定的に考えられていた。『千のプラトー』では、存立平面は構造とはされない。しかしそこには、出来事の共存がある。広い意味での共時態である。地層は実体と形相からなる。通常、ソシュール一般言語学の記号を想起するまでもなく、意味が一つの単位性をもつためには、相互の連関が必要だ。同様に、通俗的に理解されるアイデア界は、アイデアの共存であり、それによってアイデアそれぞれは限界づけられている。理論的に考えるなら、形相の単位性が成立するためには、形相の広義の共時態が必要になるはずだ。『千のプラトー』では、形相は地層が与えるものとされ、この点は問題とされない。地層には表現と内容との分節がある。表現は、内容に対して構造である。『千のプラトー』が明示的に使う構造という用語はここで初めて登場する。存立平面でも、地層の形相においても、現れることはなかった。出来事、形相、表現は、広義の共時態という共通の性格をもつ。出来事から、形相（実体とともに）、表現（内容とともに）は派生するが、これら三者を、それらの関係を按配しながら概念化することがここで試みられている。出来事と形相との関係は、ドゥルーズにおいて常に問題であったし、問題であり続ける。